

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

はしがき

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 齋, Ota, Itsuku メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/979

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



はしがき

刊行の度毎に同じセリフを繰り返しているが、『アジア言語論叢』は学内研究班の研究結果報告書である。この報告書は2年目の年度末に発行される。我々の研究班は2年毎に継続申請を行い、その都度承認されてきたので、結果としてこれまであたかも隔年刊行のように発行して来た。これで8号目である。こんなサイクルで出る学術雑誌は他にはそう無いだろう。受験勉強でよく口にされる「継続は力なり」といった格言の通り、今では引用される論文も現れるようになり、極めて緩慢な動きではあるが、「知る人ぞ知る」の雑誌になりつつあるようである。今後も牛歩の刊行ペースを維持して「知る人」の数が増えるように努力していきたい。

今回はチベット・ビルマ系の中国の少数民族言語に関するもの、具体的にはチノ語、ムニャ語の方言、ブータンで行われているチベット語の占いに関するものがそれぞれ1本、ベトナム語と日本語の対照研究が1本、青海省西寧の漢語方言の研究が1本、そして漢語音韻史に関するものである。今回はチベット・ビルマ系言語に関するものが6本中、3本を占めた。青海漢語も仮に執筆者の否定するチベット語との言語接触といった異説に従うなら、これを含めて全部で3.5本くらいになろうか。

チノ語は、膠着語的特徴と孤立語的特徴をあわせ持ち、音節構造は極めて簡素化されている。林氏は何度も現地を訪れて、チノ語の体系的記述を行い、博士論文に纏めた（京都大学に提出、学位取得）。同言語のこれほど詳細な記述は大陸でもないだろう。今回の論文はチノ語のコピュラの機能について論じたもの。ムニャ語は西夏語の末裔とも言われる言語と同名の別言語で、まだ詳しい記述報告は出ていない。鈴木氏自身の調査結果を纏めた、これまで報告のなかった方言に関する紹介である。形態論の面で複雑な現象が見られる言語であり、詳細な報告が待ち望まれる。今回のものは本誌掲載のために **brief sketch** となっているが、それでも非常に価値がある。西田氏のは2009年3月に西ブータンの城砦、寺院など7カ所で行ったサイコロ占いに関する現地調査報告と、同占いの手引書の一部を発表したもの。文化人類学的色彩の濃い論文であるが、言語学の面でも短いものながら、特殊な分野の文献の解説が貴重である。川澄氏も青海漢語について総合的記述を行い、博士論文に纏めた（京都大学に提出、学位取得）。中国でもこういった言語は注目されており、チベット語やモンゴル語の影響が云々されているが、深く突っ込んだ研究は未だになされていないように思う。中国の漢語方言や少数民族語の記述研究は所定

の調査表を用いて一定のプロセスで行われることが多く、特にその方言特有の文法現象はそのような調査方法の下では、ちゃんと取り上げられないのが普通である。川澄氏はそのような調査方法ではなく、自分なりに調査表を作成の上で調査したようで、非漢語的な特徴を詳細に捉えている。太田は前回の古い原稿の再生に続き、今回はついに締切に間に合わせるために講義稿を提出した。資金繰りに困り、万策尽きてヤミ金融に手を出した中小企業社長の感無きにしてもあらず（全国の中小企業の社長さん、不謹慎な譬えで御免なさい！）。論文らしからぬ語り口で、創見に乏しいとの誹りを受けそうであるが、この問題を概観できるような著作はこれまでになかった。若干のオリジナリティを認めて頂ければ幸である。

2009年9月30日

アジア諸語の通時的、共時的研究
研究班代表 太田 斎